

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-01

前期ハイデガーにおける時間性と自然の現前性——テンポラリテートの解明と克服に向けて——

高屋敷, 直広

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大学院紀要 = Bulletin of graduate studies / 大学院紀要 = Bulletin of graduate studies

(巻 / Volume)

71

(開始ページ / Start Page)

27

(終了ページ / End Page)

37

(発行年 / Year)

2013-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009979>

前期ハイデガーにおける時間性と自然の現前性 —テンポラリテートの解明と克服に向けて—

人文科学研究科 哲学専攻

博士後期課程2年 高屋敷 直広

1. はじめに

本稿の目的は、『存在と時間』とその周辺時期の諸テキスト⁽¹⁾におけるハイデガーの時間論と自然概念を分析し、存在了解を導く時間性と自然との関係性を考察することで、「時間性—(テンポラリテート)—現前性」という新たな緊張関係をハイデガー自身の内に明確に見出すことである。それによって、テンポラリテートの解明問題に対し、現存在の時間性から迫る方向とは異なる、自然の側から積極的にアプローチする可能性を提示したい。そこで、以下に、その狙いについて述べておきたい。

ハイデガーは、『形而上学入門』で次のように言う。「人間がいなかった時があったと我々は言うことができない。どんな時でも人間はあったし、あるし、また〔これから〕あるであろう。なぜなら、時間は人間がある限りでのみ時熟するからである。」(GA40, 90) 1935年のこの発言は、主著『存在と時間』で提示された時間性の議論の核心を端的に表しているものとして、象徴的な言説である。すなわち、時間とは先駆的決意性を内実とする現存在の有限的な「時間性」(Zeitlichkeit) そのものであり、それこそが「根源的時間」(ursprungliche Zeit)なのであって、現存在を抜きにしては時間そのものさえありえない、というラディカルな主張である。それはまた、時間性を「存在了解」(Seinsverstaendnis)の可能的地平である「テンポラリテート」(Temporalitaet)⁽²⁾として解明し、ひいては存在概念を刷新するという大胆な構想に由来するものであった。その構想の下で新たな時間概念が獲得されることによって、自然や歴史といった各存在者の存在が新たに積極的に更新される、というわけである。その意味で、ハイデガーにおいて「〈時間〉が哲学にとって新たなキーワードとなった」⁽³⁾と言えるであろう。

とはいえ、こうしたハイデガーの時間論に重大な困難が存していることもまた、周知の事実である。第一に、人間抜きではそもそも時間がありえない、と指摘されている点である。少なくとも我々は、人間の存在を括弧に入れた上で137億年の宇宙の歴史を探索したり、その中でかつて存在したとされる恐竜や我々の祖先について研究したり、或いは宇宙そのものの莫大な時間を念頭に「時間とは何か」と問うたりすることができている。例えば、もはや古典的な指摘であるが、リクールはハイデガーの時間論が「失敗」であると厳しい批判を投げかけている⁽⁴⁾。ハイデガーの思索では、「自然そのもの」に関わる時間とはそもそも矛盾した概念になってしまうのだろうか。我々が存在する／しないに関わらず、自然は何らかの意味で「時間的」とは言えないのだろうか。

第二に、『存在と時間』以後の難題の一つでもある「テンポラリテートの未完」の問題である。もともとの存在論の構想に従えば、他者や歴史のみならず、自然の存在の根本的究明ないし自然と人間との関係を変革する狙いも、企図されていた。ところが、主著の「本論」に当たる第三篇「時間と存在」は、元来の意に反し公刊されることはなく、以後の思想展開とその解釈にとって大きな波紋を投げかけている。それに伴い、「存在のテンポラリテート」(SZ19)の最も重要な領域の一つである自然に関してさえも、主著における特殊な歪曲化のまま、課題として残り続けているのは言うまでもない。時間性へと純化していく「還元」の末に獲得される、「超越論的時間地平」(SZ41)であるテンポラリテート。この究極の時間概念の内部で、或いは「向こう側」で、自然という最広義の存在者は、いかなるテンポラールな様相を呈するはずであったのだろうか⁽⁵⁾。

詳論は本論に譲るが、端的に言って、現存在の時間性へと行き着く時間性の議論と「自然」とはどのよう

に関係するのだろうか。この問いに答えるためには、自然の時間性ないし自然の存在の「テンポラールな規定」(SZ19)をハイデガーに即して吟味することで、テンポラリテートの未完問題に一応答を試みなければならない。そこで、本稿では、以上のような問題意識の下、考察の範囲を主著『存在と時間』およびその周辺時期の諸著作・諸講義に限定し⁽⁶⁾、次のように主題を設定することにしたい。すなわち、テンポラリテートの未完に留意しつつ、主著における時間性の議論と両立する仕方、現存在に依拠しない自然そのものの時間性を「現前性」と解釈し、現存在、自然、時間を巡る新たな緊張関係の図式を提示すること。これが本稿の狙いである。結論を先取りすれば、非本来的な時熟における「現前性」とは異なつた現前性として経験される自然の時間性が、「存在了解の破綻」の内で見出されることによって、我々に対し、挫折を「内的必然性」として要求するのである。

そのため、具体的に以下の手順で考察を試みたい。まず第一に、上述のハイデガーの時間論を巡る論争点を本稿の主題に関する限りで整理し、本稿の立場を具体的に示す(第2節)。次いで第二に、時間性の内的な腑分けを整理し、『存在と時間』における時間と自然の関係について考察する(第3節)。さらに第三に、自然の解釈を巡るハイデガー自身の「緊張状態」を、ハイデガーの他の諸講義とドレイファスの解釈を参考に考察する(第4節)。最後に第四に、時間性と現前性の問題を考察する(第5節)。

2. 現存在の時間性と自然の現前性に対する視座 —ハイデガー時間論の解釈史を巡って—

それでは、まず本節で、問題の所在を明確にするため、ハイデガーの基本的な意図を踏まえつつ、彼の時間論の研究史で、「テンポラリテート」、「時間と自然」という論点に着眼し整理することを通じて、本稿の立場を明確にしておきたい。

『存在と時間』では、日常性の分析から現存在の時間性へと突き進み、第一部第三篇「時間と存在」でテンポラリテートを析出し、そこからあらゆる存在者の存在をテンポラールに究明ないし変革することが目指されている。その準備的過程で諸々の時間は時間性(=根源的時間)へと還元され、かつ回収され、それとの関係において「真正な現象」として「正当な権利」が与え返される(SZ326)。そのため、時間とはどこまでも現存在の側のものとして扱われ、よって後に見るように基礎存在論の狙いと方向では、自然の時間性は本来的に究明されているとは言い難い。

それゆえ、第一に、『存在と時間』での時間性による時間論的な戦略上、時間と自然の関係を問うことが、一方で現存在の時間性の議論を前提としつつも、他方でテンポラリテートの問題と密接に関連していることは明らかであろう。この「テンポラリテートの未完」という難題⁽⁷⁾は、周知のごとく、これまで様々に議論され、今もなお根本的解決を見ていない、ハイデガー解釈全体にとってさえ要であると言ってよい。例えば、シーアンが『存在と時間』の記述に忠実に従いながら、その内でのテンポラリテートに関する言説に依拠する仕方、書かれなかった第三篇「時間と存在」の再構成を試みているのは有名である⁽⁸⁾。またペゲラーは、『存在と時間』の根本構想が「存在の真理」を目指しつつも、それを「形而上学」という仕方ですべて遂行してしまったゆえに挫折したと言う。つまり、「実存を存在の教説の基礎として確立しようとした」ため「形而上学」に陥ってしまったと解釈する。だがこれは、後期の形而上学批判の思想やハイデガー自身の弁明に大きく依拠するものである。彼は、挫折と未完が『存在と時間』の根本構想ないしその本論部である「時間と存在」に潜む内的必然的要因によるものだと重要な指摘をしつつも、その解明を果たしているとは言い難い⁽⁹⁾。こういった動向を考慮し、近年では、例えば、仲原は、「時間と存在」の慎重な「再現」とその「挫折」の究明を試みた上で、挫折の原因を「思想の最も原理的な部分に関する捉えなおし」によるものとし、根源的な「歴史性」の観点から『存在と時間』の真意を存在の歴史的思索として指摘している⁽¹⁰⁾。その過程で、「企投の根源的な破綻という現象を手掛かりとして存在の意味を解明しようとしている」と『存在と時間』を解釈する点は、筆者も賛同する⁽¹¹⁾。だが、本稿では、むしろ、そのような試みを「自然」の観点から考察する必要があると考える。というのも、後に述べるように、現存在と自然との接合点こそが、まさにハイデガーにとって事柄としての「挫折」の現場であり、時間の問題を現存在から脱中心化せざるをえないような、ある意味で積極的な「挫折」の「瞬間」であると考えられるからである。

では、さらに踏み込んで、第二に、「自然」の観点での時間論に対する解釈はどうであるのか。ハイデガーの時間性を核とする時間論では、自然に関する時間的な規定は、さしあたり、非本来的な意味での現前性という現在中心的な時間的地平で時熟するものであると捉えられている (SZ411 - 428)。但し、こうした『存在と時間』での議論を踏まえ、直後の『現象学の根本諸問題』(以下『根本諸問題』と略記)や『論理学の形而上学的始原諸根拠—ライプニッツから出発して』(以下『論理学』と略記)におけるハイデガー自身の補完的な記述では、より一層立ち入って、「実存」に対置される「眼前存在」(Vorhandensein)の問題が「現前性」(Anwesenheit)の観点から解釈されている。問題は、この現前性をどう捉えるかということである。例えば、グレーシュは、『存在と時間』における「〈生きとし生ける〉ものとしての自然」という「単なる目前性」に尽きない自然の記述を巡って、道具的な「道具的存在」とも事物的な「眼前存在」とも異なる「第三の存在論的カテゴリー」を模索する必要性を示唆している⁽¹²⁾。ところが、こうした重要な指摘にも関わらず、その具体的な考察および自然と時間との本質的な連関についての説明は結局なされていない⁽¹³⁾。その点に関して、他方、ドレイファスの解釈は、現存在と自然の関係性、および時間と自然の問題について考える際に有効である。彼は、ハイデガーに内在的に、自然の眼前存在に留意しつつ、時間性が「脱時間化」されるところに現前的な「自然時間」を読み取り、それが「コスモス」としての自然の理解に資する時間であると積極的に解釈するからである⁽¹⁴⁾。この解釈について、後にその問題点も含めて批判的に検討することにした。

以上の諸点から、肝要なのは、現存在の時間性、「脱自的瞬間」に極まる時間性と「現前性」という時間的地平とがどのように連関し、またそれがハイデガーにとってどのような意味を持つのか、を問うことであると考える。よって、本稿では、この点に焦点を絞って考察するという立場を取ることにする。

そこで、次節では、ハイデガーの議論を『存在と時間』に即して内在的に確認し、一方の中心概念である時間性の腑分けと、それと他方で問題点である「自然」との内的連関を見定めたい。

3. 『存在と時間』における自然概念の読解 —純然たる眼前存在性への示唆—

それでは、本節で、『存在と時間』における時間性の内在的な腑分けを整理し、そこでの自然の時間性に関して押さえていきたい。

原著『存在と時間』の時間論は、繰り返し述べてきたように、日常性から不安と決意性を介して本来性の次元に至り、そこで顕現する現存在の存在の意味である「時間性」から、全ての現象を解釈し直すという戦略が基本的に採られている(第一部第二篇第四章)。つまり端的に言って、第六十五節の時間性の議論を軸として、「本来的」(eigentlich)・「非本来的」(uneigentlich)の様態の区別により、これまで考察の出発点とされてきた現象である「日常性」(Alltaeglichkeit)の次元が根源的に解釈し直され、時間性との関係から根本的に基礎付けられるというわけである。ハイデガーはこの作業を「時間的解釈」と呼ぶ(SZ331)。この「繰り返しの戦略」⁽¹⁵⁾ないし反復的「拡大運動」⁽¹⁶⁾において、根源的時間性と諸々の存在との関係が明かされる。その過程で、「時熟の諸レベルの位階化」⁽¹⁷⁾に応じて、「時間」という現象が明確に区別されているのである。以下、簡潔に要点を整理しておこう。

第一に、実存の本来的な次元である有限な「先駆的決意性」(vorlaufende Entschlossenheit)を内実とする本来的で根源的な「時間性」(SZ326 - 327)こそが、言葉の真の意味での「根源的時間」であるとされる(SZ329)⁽¹⁸⁾。これは「既在しつつある現成化する到来」(SZ326)という統一な構造を持つものであり、これら三つの脱自態が到来に優位を置き時熟することで、「瞬間」(Augenblick)にそのつど結実する(SZ338)。つまり、まさに「過程」⁽¹⁹⁾として、諸脱自態が脱自的に(自らを)「時熟する」(sich zeitigen)動きそのものである。それを元に、第二に、第一部第一篇で主題とされた「世界内存在」(In-der-Welt-sein)の時間性一般が、「時間内部性」(Innerzeitigkeit)という実存論的概念に基づき、「世界時間」(Weltzeit)とされる。これは、現在を中心に非本来的に時熟する時間性の様態に対応した時間である。第三に、「歴史性」(Geschichtlichkeit)として、現存在が歴史的にあるという事態の可能性が時間性に基づいて明かされている。第四に、根源的な時間性からの「水平化」(Nivellierung)の果てに「通俗的時間」(vulgaere Zeit)が位置づけられている(SZ422)。これは「今・時間」(Jetzt - Zeit)とも呼ばれ(SZ421)、ただただ我々の存在とは無関係に過去から現在、そ

して未来へと継起的に流れ去る「今連続」(Jetztfolge)であり、第一の根源的時間の対極に位置するものである。我々にとって通常支配的で一般的な時間とはこのことを指している。以上の諸点を踏まえ、第五に、「テンポラリテート」は、純化の結果析出された「時間性」が特に「存在了解」の時間的地平の観点で限定されて言われる時間のことであるので、そのような特権的な機能に留意し名称が区別される。

それでは、これらの腑分けと関連して、自然の時間的な解釈はさしあたりどうなっているのか。

それを見る上で、まず、主著『存在と時間』での自然概念の基本的特徴を押さえておきたい。「自然」(Natur)は、第一に、我々に利用可能な「環境世界的自然」である。すなわち、自然とはまず「環境世界」(Umwelt)で暴露される「自然産物」として解された自然に他ならない(SZ70)。次いで第二に、「道具」(Zeug)の理論的主題化と相まって、科学的認識の対象とされる自然が「眼前存在者」(Vorhandenes)と考えられている。どこまでも現存在の日常性から出発する『存在と時間』では、専らこれら二点の様態が論じられ、第一次的には、自然は現存在に固有の自己本来性の優位に基づいて、日常的な配慮の世界(非本来的)の内で考察されるに留まっている。それゆえ、周知のごとくレーヴィットは、ハイデガーでは専ら自然が諸指示連関における「環境自然」であり、また他の存在者の中の世界内部的存在者に過ぎない、と批判しているわけである⁽²⁰⁾。

そこで、上述の腑分け作業と合わせて、自然について時間論との関係で見ると、第一に、自然に関する時間は配慮的気遣いのもとに考えられていると言える。それゆえ、自然とは環境世界的に気遣われたものとして、非本来的時熟によって配慮の内で現成化させられるのである。第二に、自然はそこから理論的発見によって近づきえる物、「眼前存在者」として、純粋な「今連続」の現在の内で「欠性的」に看取されるようになり、時間はその考察を可能にする物理的で客観的な時間として解されることになる。以上の二点から、自然は時間の「内部」で、すなわち現存在の時間内部性の故に、世界内部的に出会われる存在者であると言える。つまり、自然は「世界内部性」に属し、その時間も「時間内部性」に従うという仕方で、現存在の時間性に従属的であると見なせるであろう。これらの諸点を考慮すれば、自然に関する時間が本来的時熟においてどうか不明瞭なだけでなく、やはり、専ら「現在」(Gegenwart)を中心とした「現前性」という時間的地平において理解されていると言ってよい。

しかし、実のところ、事情は複雑である。自然を巡っては、『存在と時間』でさらに次の二つの重大な観点が指摘されていることもまた、看過されてはならない。すなわち、第一に、確かにハイデガーは、世界内存在には秘匿されたままのものとしつつも、「<生きとし生ける>ものとしての自然」に言及している(SZ70)。第二に、肝要なことには、ハイデガーは「純然たる眼前存在性」(SZ73)の事実にも触れているのである。多くは語られていないものの、そのことは、道具の故障状況を巡る議論の中で、道具的存在性の第一次的な優位に基づいてなされてきたそれまでの世界性の分析に、一瞬裂け目を入れるかのごとく次のように指摘されている。「道具」が故障して「目立つようになる」ことに際して、「道具事物」(Zeugding)としての使用不可能なものは、「その道具的存在性の内で」同時に「また絶えず眼前存在するものになりさがって」(Ständig auch vorhanden war)しまうのだ(SZ73)、と。つまり、さしあたり道具的存在者として滞りなく使用していた物が、何らかの不具合が生じたり壊れたりして、その使用が中断される時に、むしろもとの眼前存在性に即してさえも我々に迫ってくる、というわけである⁽²¹⁾。また、はっきりと別の箇所では、存在者の眼前存在性に関して、「存在者は、存在者がそれによって開示され暴露され規定される経験や識別や補足には依存せずに、存在している」(SZ183)とさえ指摘されているのである⁽²²⁾。

先述の二点と異なり、これは明らかに現存在の「頽落」(Verfall)の内で見出される自然などではない。我々に対して「押し付けがましく」(SZ73)迫ってくるような、科学的・理論的認識の対象とは異なつた眼前存在的な自然ないしその現前であり、我々が了解する以前から独立的に「そこにある存在者」と言えるであろう。こうした自然に対するハイデガー自身の配慮を、先のレーヴィットの批判は見落としていると言わざるを得ないのである。そして、現存在の存在了解の地平にそのまま収まらないこのような自然の存在こそ、『存在と時間』の直後の時期にハイデガーが乗り越えるべく格闘した主要テーマの一つであり、後年の「ピュシス」解釈へと続く問題系であったと考えられるのである。それ故、さらに、以下の考察では、ドレイファスを批判的に参照しながら、直後の時期の諸講義における議論へと目を向け、現存在の時間性と自然の関係を考察していきたい。

4. ドレイファスのハイデガー解釈の検討

さて、ハイデガーは、前節の最後で明らかになった「絶えず眼前存在するもの」(SZ73) ないし我々の暴露以前からそれがある通りに存在している「存在者」に対して、どのようにアプローチを試みるのか。さらに言えば、時間の観点ではそれらはどのように考えられているのだろうか。「開示され暴露され規定される経験や識別や補足には依存せずに、存在している」(SZ183) 存在者とは、明らかに存在者の存在の開示を根源的に可能にしている時間性からさえ独立してありうるものである。それ故、こちら側からの時間的企投によってはそのものとしては開示されえない代物であるのではないか。1928年の『論理学』におけるハイデガーの次の発言が、事の深刻さを物語っていると思われる。すなわち、「現存在を時間性として学的に解釈することを、どの程度まで普遍的・存在論的な仕方と捉えることができるかという問い——それは私自身決定することができず、私にとってはまだ完全に暗い〔見通しの立たない〕問いである。」(GA26, 271) さらに同講義の別の箇所では、「人間がこの地球に住まうということがなくても、宇宙は存在できるのであり、宇宙は人間が実存するずっと前から存在していたのである」(GA26, 216) とさえ言われているのである。これは、本稿冒頭で掲げた「人間＝時間」というかのラディカルな言説と、どのように整合的に考えればよいのだろうか⁽²³⁾。

そこで、いよいよ、時間性と自然の関係、また自然の時間性に迫るべく、以下にドレイファスの解釈を検討してみたい。ドレイファスは、自身のハイデガー解釈の内⁽²⁴⁾、このような困難に対して取り組んでいる。彼の分析を手掛かりにしながらハイデガーの議論を確認していきたい。

第一に、「自然の独立的実在性」が問題にされている。彼によれば、ハイデガーには自然を巡る二重の態度を指摘することができる。つまり、ハイデガーの思索では、自然的存在者の独立性と、自然の存在の(現存在に対する)依存性という二つの側面が同時に考えられている。事実、ハイデガー自身が『論理学』で次のような逆説的な定式化を行っている。「1. 現存在が実存しないとしても、存在者はそれ自体として存在者である。2. 存在は<存在する>のではなく、存在は現存在が実存する限りでのみ与えられる」(GA26, 194 – 195)。こうした見解に拠りつつドレイファスは、「現存在だけが物事を理解する」という了解の機能に留意し、「一つの存在者としての自然」ないしは「存在者の集合としての自然」は現存在に依存しないと指摘しているのである⁽²⁵⁾。

第二に、それらを繋ぐのが、言うまでもなく実存する現存在の「存在了解」である。つまり、一方で、「自然物を含む各領域の存在仕方の了解」は現存在に依存している。その実存論的事実性は極限まで留意されるべきである。しかし他方、この了解作用の内、「脱コンテクスト化」により「眼前存在性」を了解しているのであるから、「眼前存在者はたとえ現存在が実存しなかったとしても存在していたであろうということ」を了解できる、というのである⁽²⁶⁾。「独立した実在を理解するということは、われわれの遂行していることとしても、何が実際に存在するのは我々に依存しない。」⁽²⁷⁾

第三に、こうした分析の末、ドレイファスは、「自然はわれわれとは独立に、何であれそれがその通りのものであるし、それが持っている因果的性質が何であれ、自然はまさにそうした因果的性質をわれわれとは独立に持っているのである」⁽²⁸⁾と結論付けるのである。こうして彼は、ハイデガーの内に、現存在から独立した自然そのものが存在者として許容されることを看取している。それは前節で見た通り、『存在と時間』に関してさえそうであると言う⁽²⁹⁾。

以上のことを踏まえて、第四に、ドレイファスは「独立した自然」に見合う時間を「自然時間」(natural time)であると解している。それが意味するのは、「現前する今の前後を含んだ今継起として了解された時間」であり、「自然の出来事の純粋な継起」を可能にする時間である⁽³⁰⁾。ドレイファスは「脱世界化」によって空間性から「同質的な自然空間」が示されることを引き合いに出しながら、同様に、時間性が「脱時間化」されることによって「自然の出来事の純粋な継起」があらわになる可能性を指摘する。彼にとって肝要なことには、この継起がなければ、ハイデガーが「コスモス」と呼ぶもの、そして自然科学があらわにする「自然それ自体」といったものを「理解する」ことは「不可能」になってしまうゆえ、自然時間が「何らかの形で出来事を純粋に継起的に順序づけることは否定できない」と、それを要請するのである⁽³¹⁾。

このようなドレイファスの解釈は、自然ないし存在者の独立性が認められる点、存在了解を介した現存在と自然との関係図式が読み取られている点で重要である。なぜなら、時間に関して現存在の時間性からの脱中心化が試みられており、自然時間がそれを担っている、と言えるからである。

しかしながら、その反面、次のような重大な問題点が存していることを我々は看過できない。第一に、ドレイファスのハイデガー解釈が専ら『存在と時間』第一部第一篇の日常性の次元のみを考察の有力な対象として前提しており、第二篇の時間性の議論を正面から扱っていないという基本的な戦略上の問題がある。そのため、結局のところ、彼はテンポラリテートの問題に正面から取り組んではいない。

第二に、現存在と自然とを繋ぐテンポラルな規定が、まさに「自然時間」に委ねられている点である。当のハイデガー自身は、先に確認したような時間性における内在的な段階の議論を基礎に、同年の『根本諸問題』で「世界時間」に言及する際に、伝統的に暗黙の前提とされてきた「自然時間」は「『与えられていない』」(GA24, 380)と断言する。この自然時間とはあくまで「世界時間からの派生」である。このようなハイデガーの留意に厳密に従うならば、「コスモス」(ピュシス)という「存在者の全体」に関わる時間性を「自然時間」と等置することは本来できないはずであろう。

それに関連して、第三に、「自然時間」と「自然そのものの開示」との関係が曖昧である。厳密に言えば、やはりこの二つは直結しないはずであるが、ハイデガーに即したこれらの本質的な関係については論究されていない⁽³²⁾。そこには、「脱コンテクスト化」によりあらわになる自然とその眼前存在性が、安易に「コスモス」としての自然に重ね合わされてしまっているというドレイファス自身の前提が影響していると考えられる⁽³³⁾。

さらに、第四に、ドレイファスの議論は、「存在了解」の「了解」の機能に全面的に依拠しているため、〈了解可能であるためにはどうであるはずか〉という前提の下、自然が「継起的」に存在しているという風に、結局自然を現存在の側へと半ば強引に引き付けて解釈してしまっているのである。それゆえ、継起的な「自然時間」が現行で自然に最もふさわしいという誤解が生じてくるのである。

こうして見てくると、確かに、眼前存在というあり方に着眼し、存在者としての「自然の独立性」を条件付きで認めている点、その上で「現存在(時間性)－存在了解－自然(自然時間)」という図式でもって時間を現存在から脱中心化しようと試みられている点は有益である、と言えるであろう。だが、ハイデガー自身の「未解決の緊張状態」(unsolved tensions)⁽³⁴⁾という「挫折」を含んだこの時期の繊細な状況を看取しながらも、それを乗り越えるべく「自然時間」として自然の時間性を読み違え、それにより現存在の時間性と自然との関係を付けようとしている点は、早計であると言わざるを得ない。すなわち試みへの応答は不十分である。よって、彼の議論を批判的に継承しつつ、最後に当の「未解決の緊張状態」の現場とその意味を考察することにしよう。

5. 時間性と自然の眼前存在性 —現前性としての自然の時間性—

さて、最後に、独立的な自然の時間性と、それと現存在の時間性との関係を究明したい。

これまでの議論から、ハイデガーにおける「自然」を整理しておこう。第一に『存在と時間』に顕著なように「環境世界的自然」(SZ70)として出会う自然がある。第二に、理論的考察の対象となる「眼前存在者」(SZ71)として暴露される自然がある。第三に、現存在の存在了解とは独立的にありうる「純然たる眼前存在性」(SZ73)の次元での自然を指摘できる。後述のように、換言すれば、これは特に「不安」(Angst)という根本情状性の中で純粋な他性として開示される自然である。

これらを巡って肝要なのは、「存在了解」という現存在の根本的な作業である。というのも、『存在と時間』の狙いこそ、存在了解の徹底化、すなわちテンポラリテートの析出だからである。この構想では、第一と第二の自然が「気遣い」(Sorge)の配慮の様態ならびに認識という様態において見出される。そしてその存在が、現存在の時間性に基づく仕方、現在中心の時熟で「現前性」として時間的に了解されるわけである。ところが、明らかに第三の自然に対しては、その営みの内部である種の破綻が起きていると言わねばならない。つまり、第三の自然とは、存在了解の哲学的・学問的、ないし概念的徹底化の枠内にそのまま収まることができないものである。

ハイデガーは、この点を正面から考察するために、かの「未解決の緊張状態」に揺れながら、基礎存在論

から「メタ存在論への転換」を「基礎存在論の内的必然性」として表立って主張するようになる（GA26,196－202）。そこで彼は、存在了解の現場を析出する試みをするのである。彼は、「存在論が、そこから出発していたところへと帰還するという内的必然性を、我々は人間の実存の原現象において明瞭にすることができる」とし、この原現象こそが「存在を了解すること」であるとする。ここでは、第一に、『存在と時間』では「常に既に」、「そのつど既に」、「アプリアリに」といった〈既に行ってしまった側面〉を強調して言われていた（前存在論的）存在了解が、それがまさに生起している「原現象」として分析されているのである。彼は、それを踏み込んで「世界企投」（Weltentwurf）と呼ぶ（GA26,251）。その際、第二に、「そこから出発していたところへと帰還する」として、了解の現場がそもそも被投的なものであるという人間存在の「被投性」（Geworfenheit）の現実性が強調されている。つまり、『存在と時間』に顕著であった「了解」（Verstehen）や「企投」（Entwurf）への定位から、人間自身を含めて既にある被投的な自然へ、力点がずらされていると言ってよい。そして、第三に、人間を含む全体として、「全体としての存在者」という意味での眼前存在者が、ここでようやく問題にできるのである。

ハイデガーは、この存在了解の現場で言い当てた「世界企投」という現存在の超越の現象を、さらに自然の側からの「世界進入」（Welteingang）という観点で次のようにまとめる。すなわち、「眼前存在者は、たとえばそれが文字通り世界内部的な存在者とならなくても、またそれにとって世界進入が起きるわけではなく、そのための機会がそもそもないとしても、それが存在する様式の、そしてそれであるところのものとしての存在者なのである。」（GA26,251）つまり、世界企投とは、ひいては世界進入さえ、どこまでも現存在の側の遂行であり、そもそもそれからは独立的に、ただ眼前存在者はありうると明言するわけである。ここで初めて存在了解は、己の了解の地平に収まらない仕方で、自然が常に全体としてありえるという事実を「了解する」のである。この意味で、筆者は、眼前存在者と対峙する際の存在了解の「破綻」⁽³⁵⁾こそ、『存在と時間』既刊部の上にもともと築かれるはずだった予定としては、テンポラリテートが「挫折してしまった」原因であると考えられる。だが、この破綻は、了解不可能なものをそれとして「了解する」という意味で、テンポラリテートの構想にとって積極的な挫折であると言いたい。それゆえ、ここで、「現存在—存在了解（の破綻）—自然」という関係性を看取したいと考える。

それでは、このような自然の時間性を如何に解釈すべきだろうか。これは、前節で批判したドレイファスの「自然時間」とは全く異なることが今や明らかである。彼の言うように、了解内部での「脱時間化」によって見出されるのでもなければ、純粹に「継起的な現前」という意味での現前性でもないからである。むしろ、ハイデガー自身の言葉に即して、「全き不審さ」を伴った現前性、と言わねばならないであろう⁽³⁶⁾。ハイデガーは「形而上学とは何か」で次のように述べる。「不安の無の明るい夜」の中で初めて、「存在者を存在者として開き示す根源的な開示性」が立ち上る。つまり、「不安〔の無化する作用〕」の中で、全体としての存在者が、「これまでは覆蔽されていた全き不審さ」（volle bislang verborgene Befremdlichkeit）とともに「端的な他なるもの」（das schlechthin Andere）として開示される（GA9,114）⁽³⁷⁾。ここで言われているのは、まさに現行の存在了解が「無化」（Nichten）され破綻する事態であり、それによって立ち現れる不審な存在者の現前である。この現前性が、あくまで「存在了解」の破綻において見出されるからこそ、言うなれば「現前性」という名指し以外では呼ばれないのではなかろうか。これは、基礎存在論の方法論とメタ存在論の問題への取り組みにあたり、より『存在と時間』の根本構想に肉薄しつつ「挫折」の超克を狙うすれすれのところでは、自然の時間性が、現存在の時間性ないしテンポラリテートとの排除できない繋がりから言われる他なかった結果である、と考える。とはいえ、テンポラリテートの重心は、僅かに、しかし確かに自然という存在者全体の方向へ置き移されている。言い換えれば、実存の被投性をそこに含む自然の側から、この根源的な時間的地平へと迫られていると考える。それゆえここに至って、本稿では、上述の「現存在—存在了解（の破綻）—自然」という図式をさらに踏み込んで解釈し、「時間性—（テンポラリテート）—現前性」という、括弧つきのテンポラリテートをはさんだ繊細なテンポラールな図式が見出される、と結論付けたい。

6. おわりに

それでは、本稿での結論として最後に以下の諸点を提示しておきたい。

第一に、ハイデガーにおける難題「テンポラリテートの未完」に際して、存在了解の徹底化で迫る方向が不十分であることが確認された。それが結局著作としての『存在と時間』の挫折、「時間と存在」の挫折を招いた大きな原因であったと言える。しかし、それはただの挫折ではない。被投性という事柄により肉薄して存在論の内的必然性を経験し、了解から独立してありうる自然という存在者を「了解する」積極的な挫折である。

第二に、「全き不審さ」という現前性との関係から、「時間性—（テンポラリテート）—現前性」という、括弧つきのテンポラリテートを消尽点とし、従来の時間性中心的な観点を脱中心化するような、繊細な三項図式が指摘できる。この関係性を考慮してこそ、テンポラリテートの未完の問題を、ハイデガー思想の全範囲にわたって克服することが目指されなければならないはずである。

第三に、ハイデガーにおけるこうした関係性の意味とは何か。以上のような本稿の考察によって、次のように言えるであろう。「存在の真理」(SZ218)を開示するためにハイデガー自身が身をもって示した「破綻」という逆接的な方途であった、と。彼が存在論の転換において強調した「内的必然性」とは、この破綻を経験することであったと考える。そしてさらに言えば、自然が根源的な時間の層で現存在と接合しうることはやはり否定できない。

よって、こうした図式と、ハイデガーにおけるその後の自然へのアプローチ（中・後期のピュシス解釈）とはどのように関連していくのだろうか。特にこの点を次への課題として掲げつつ、本稿のおわりとしたい。

注

- (1) 以下、ハイデガーからの引用に関して、『存在と時間』は慣例に従い単行新版（*Sein und Zeit*, Tuebingen : Max Niemeyer, 18 Aufl., 2001）を用い、略記 SZ と頁数をアラビア数字で併記し、その他の著作や講義録等はハイデガー全集（*Gesamtausgabe*, Frankfurt am Main : Vittorio Klostermann, 1975ff.）を使用し、略記 GA と巻数および頁数をアラビア数字で併記し、全て本文中に典拠を記すものとする。引用文中の強調点と〔 〕を用いた補足は筆者によるものである。
- (2) 「テンポラリテート」は、「あらゆる存在了解の可能的地平としての時間」(SZ1) という、時間性の存在論的な機能の次元を言うものである（SZ18 – 19）。
- (3) Otto Poeggeler, *Neue Wege mit Heidegger*, Freiburg/Muenchen, 1992, S115 ; translated by John Bailiff, *The parts of Heidegger's life and thought*, New Jersey, 1997, p. 73.
- (4) 自然を基礎付ける時間を、自律性を持つ「運動の時間」と見るリクールは、現存在の時間性へとあらゆる時間現象を選元し回収する『存在と時間』の時間論、特に根源的時間性から専ら派生的に位置づけ直された「通俗的時間」の導出に対して、ある際立った「失敗」を見て取っている。P・リクール著、久米博訳、『時間と物語Ⅲ』、新曜社、1990年、145 – 161頁。本稿では、そうしたリクールによるハイデガー時間論に対する批判を、とりわけ、彼とともに根源的時間と通俗的時間との関係性まで含めて考察することはできないので、リクールとの批判的な対話は別稿に譲る。これについてはさしあたり以下を参照。杉村靖彦、「…まで生き続けること—リクール『記憶・歴史・忘却』における〈ハイデガーとの論争〉」、秋富克哉他編、『ハイデgger『存在と時間』の現在』所収、南窓社、2007年、209 – 227頁。
- (5) また、こうした問いは、我々にとって、狭くハイデガー研究に留まらない事情を孕んでいると思われる。かの「3.11」以降、「自然と人間」の関係が、問い直されるべき緊急課題として浮上している「この今」にあってこそ、現存在のあり方の限界を認識すること、それを踏まえた上で新たに自然との関係性を構築するという課題が求められている、と筆者は考えるからである。自然は「想定外」に人間を襲い、その時間はこちらの計算していた時間と異なり、我々を待ってはくれなかった。我々は、この場では叙述しきれない生々しい経験をしたばかりである。およそ自然科学を基礎に専ら測定可能な地平の内に関わろうとしてきた人間、そして我々を待つことのない「自然の時間」が、今まさに根本的に反省されるべき「時」なのではないだろうか。本稿の底流には、ハイデガーの思索にその解決の手掛かりや原理的考察を求めたい、という問題意識が流れているということも付記しておきたい。
- (6) 本稿では、第一に、主著である『存在と時間』に基づいて事柄を考察することを基本的な旨としたい。というのも、しばしば指摘されるように、『存在と時間』の以後、「時間と存在」の挫折と相まって、ハイデガーは刻々とその乗り越えに着手し続けるからであり、我々はそうしたハイデガー自身の「自己解釈」に対し総じて慎重に迫らなければならない、と考えるからである。さらに言えば、周知のごとくハイデガー思想の影響があくまで主著を支点としている以上、この書物の内実第一に依拠することこそが、その後の思想形成へとアプローチしていく必要条件であると考えられるからである。その上で、第二に、本稿ではグレーシュの見解を支持ないし参考にし、「存在と時間」という「作業場」という観点から、同時期の諸著作と補完的に「存在と時間」という主題に迫るという方法をとる。J・グレーシュ著、杉村靖彦他訳、『〈存在と時間〉講義—総合的解釈の試み』、法政大学出版局、2007年、3 – 5頁。それはまた、その後の後期マルブルク講義や著作が、書物としての『存在と時間』とその本論部に当たる「時間と存在」が予定されていた形で遂行不可能であることにハイデガー自身が気づき、議論の枠組みの改変に努めようとしている肝要な時期に当たる、と考えられ

- るからである。仲原孝、『ハイデガーの根本洞察—「時間と存在」の挫折と超克』、昭和堂、2008年、7—12、629、661—662頁参照。よって、第三に、表題ないし本稿で想定されている「前期」という時期的な区切りも、上記二点から『存在と時間』とその直前/直後の時期」という意味で用いており、表記に関しては、慣例に倣い一言で「前期」としている。当の講義録等の扱いに際しては、主著とのずれや変化に留意しながら、必要な範囲でのみ参照することとしたい。無論、こうしたハイデガーの思索の時期区分の問題は、ハイデガー自身の自己解釈の問題と相まって一つの難題であるゆえ、その詳細かつ全般的な規定に関しては今後の課題としておきたい。いずれにせよ、初期の思想、また中期から後期へかけて展開されるその後の思想、加えて「転回」(Kehre)の問題も、主著および作業場としての「存在と時間」を綿密に考察した上で扱うべき課題であると考えられる。この点についてはさらに以下を参照。仲原、同上、256、650—652、669—673頁。細川亮一、『意味・真理・場所』、創文社、1992年、3—8頁。なお、ハイデガーの「自己解釈」の問題については、H・エーベリング著、青木隆嘉訳、『マルティン・ハイデガー』、法政大学出版局、1995年、第二部参照。
- (7) ハイデガー自身もこの問題についてあちこちで自己弁明を行っているが、有名なのは『ヒューマニズム書簡』における次の言明である。すなわち、『存在と時間』で言及されている〈企投〉が表象する定位だと理解されると、それは主観性の働きとして捉えられるようになってしまい、〈存在了解〉が〈世界内存在〉の〈実存論的分析論〉の範囲内で唯一考えられる様な仕方、すなわち存在の明るみへの脱自的な関わりとしては考えられないことになる。よって、「ここで全体が逆転する」はずであった「時間と存在」が差し控えられたのは、「思索がこの転回(Kehre)を十分な仕方と言うことに無力」であり、かつ「形而上学の言葉の助けによっては切り抜けられなかったから」である(GA9, 327f.)。この主張自身は明らかに後期の思想圏に基づくものであり、我々はここでこの主張を鵜呑みにするわけにはいかない。本稿では、より挫折の現場に着目して考察したい。
 - (8) Cf. Thomas Sheehan, *Time and Being, 1925-7*, in : Christopher Martin, *Heidegger. Critical Assessment*, vol.4, Routledge, London, New York, 1992, pp. 29-67.
 - (9) Vgl. Otto Poeggeler, *Der Denkweg Martin Heideggers*, Verlag Guenther Neske, Pfullingen, 1963, S. 177-180.
 - (10) 仲原孝、前掲書、353—355頁。
 - (11) 同上、208—214頁。
 - (12) J・グレーシュ、前掲書、152頁。さしあたりハイデガー自身は、それを「我々を襲い、風光として我々を虜にするものとしての自然」(SZ70)と呼んでいる。
 - (13) この点については、木田も同様に不十分である。木田は、ハイデガーにおけるニーチェの影響とその受容の早さに着眼し、『存在と時間』の存在論プログラムにおけるテンポラリテートの挫折に関して、本来は「存在=生成」という新たな存在観がそこで構想されていたと推察している。そのことはまた、後期において顕著になるソクラテス以前の古代ギリシア的「ビュシス」読解と結びついているとも指摘している。この指摘自体は、今後さらなる考察を必要とするような興味深いものである。だが、テンポラリテートの再現の試みの中で中心的な役割を果たすとされる「現前性」と、そうした「生成」ないし「ビュシス」とがどのように連関するのかが結局見出せていない。彼によれば、その現在という地平、すなわち存在了解の地平に対して根源的な自然が適さなかったというに留まり、そこからハイデガーにおける後期思想への移行を説くのみである。木田元、『ハイデガーの思想』、岩波書店、1993年、126—130、139—142、152—156頁参照。および木田元、『ハイデガー「存在と時間」の構築』、岩波書店、2000年、第三章第七、八節参照。
 - (14) Hubert L. Dreyfus, *Being-in-the-World. A Commentary on Heidegger's Being and Time, Division I*, The MIT Press, Cambridge, Massachusetts, London, England, 1991, pp. 246—281。(ヒューバート・L・ドレイファス著、門脇俊介監訳、『世界内存在—〈存在と時間〉における日常性の解釈学』、産業図書、2000年、283—323頁。)
 - (15) P・リクール、前掲書、116頁。
 - (16) J・グレーシュ、前掲書、377頁。
 - (17) P・リクール、前掲書、112、148—149頁。
 - (18) ちなみに、ブラットナーは、「根源的時間性」を「本来的時間性」として「本来的時間性」から区別し、前者をより根源的なものとして考えている。根源的時間性とは、「到来」「既在性」「現成化」の統一体を意味し、本来的/非本来的時間性の両方が共有する「様態的に無差別な」形式的構造であるとされる。さらにこの区別に伴って、到来の優位もこの根源的時間性でのみ認めべきだと解する。Cf. William Blattner, *Heidegger's Temporal Idealism*, Cambridge University Press, 1999, pp. 26, 98—99, 117. しかしながら、『存在と時間』では「本来的で根源的な」時間性と指摘されている点、また到来の優位は基本的に本来的時間性でのみ認められるという点に基づき、本稿では彼の解釈を採用しない。
 - (19) J・グレーシュ、前掲書、第二部第三章第六十五節参照。
 - (20) K・レーヴィット著、中村啓・永沼更始郎訳、「ハイデッガーの存在の問題に寄せて—人間の本性と自然の世界」、ベルント・ルッツ編、『ある反時代的考察—人間・世界・歴史を見つめて』所収、法政大学出版局、1992年、421—439頁。特に435—438頁参照。
 - (21) 『存在と時間』では、結局、この点についてはそれ以上触れられず、修理を通じて道具的存在性のうちへと「やがて再び引き下がってしまう」とされている(SZ73)。
 - (22) この「存在者は、存在者がそれによって開示され暴露され規定される経験や識別や補足には依存せずに、存在している」(SZ183)という存在者に関する言明は、直後に続く「存在は、存在了解といったものが己の存在に属する存在者の了解の内でのみ『存在する』」(SZ183)という存在に関する基本的な理解と呼応する形で、『存在と時間』の読解上の、またそもそも存在の第一次性に対する存在者そのものの独立的な実在性を巡る「パズルパッセージ」として、いかに整合的に解釈すべきなのか。本文箇所直前で指摘した「道具の故障状況」における「眼前存在性」の出現の議論と併せて、近年、こうした点がハイデガー解釈上の一つの争点となっている。Cf. David R. Cerbone, *World, World-entry, and Realism in Early Heidegger*, in: *Inquiry* 38, 1995, p. 401. 例えば、カーマンは、上の前者の言明に関わる事態を「存在者の実在論」(ontic realism)と名づけ、そこに「道具的存在性」ないし「眼前存在性」という物への基本的なカテゴリーを免れた意味での眼前存在者を読み取ろうとしている。Cf. Taylor Carman, *Heidegger's Analytic. Interpretation, Discourse, and Authenticity in*

Being and Time, Cambridge : Cambridge University Press, 2003, pp. 157 – 158. そうした論点を批判的に継承しつつ、池田は、第一に上の言明と道具的存在者の「自体存在」(SZ71) という指摘との整合性、第二に「適所をえさせること」(bewenden lassen) ないし「存在させる」(sein lassen) が持つ「解き放ち」や「妨げないこと」という語義、加えて第三に『ナトルプ』報告でのアリストテレス『自然学』解釈などに依拠しながら、「道具的存在者」をもそのような「存在者」に含め現存在からの独立的実在性を認めるべきだ、と大胆な指摘をしている。池田喬、「道具・事物・自然—ハイデガー『存在と時間』と実在問題」、『哲学・科学史論叢 第十二号』所収、2010年、67 – 92頁。特に68 – 69、75 – 76、80 – 83頁参照。しかしながら、「有用な何か・役立ちうる物質」の実在性については言えたとしても、そもそも現存在の実践的交渉という前提を離れてまで「道具」(の自体存在) と言えるかどうかは疑問が残る。それゆえ、(無論別稿にてこれらの見解に対する詳細な検討を別途要するが、) 以上のような状況に鑑み、本稿では、「存在了解」の「現場」に着眼・定位することにより、さしあたり道具の存在に力点を置かず、またカーマンがさらに指摘するような即科学の対象として扱おうような自然としてでもなく、あくまで「全体としての存在者」としての「自然」という観点で当の「存在者」を捉え、以下、本論で検討を試みている。

- (23) 実のところ、前節で確認した諸点には、『存在と時間』で強調されている大前提が影響しているのである。すなわち、そもそも現存在の存在体制が「世界内存在」であるとすれば、主客関係の構図で自然が人間に対立させられてはならない。それはまた、現存在という存在の開示の「場」である存在者には、自然の存在さえ根本的に関係付けられていることも意味しているのである。つまり、実存論的分析論では、自然ということに関して、「自然それ自体」ないしは「自然の独立性」という観念は、基本的に触れられないのである。とりわけ自然科学が考察の究極対象として向かうべき「自然そのもの」といった観念は、「欠損的」(defizient) な様態で見ることを通じて (SZ61)、現存在の顔落の内で見出されるとき考えられているのである。筆者としては、『存在と時間』のかような事情に配慮しつつも、補完的に推察するよう同時期の他の諸著作も用いたい。というのも、ハイデガーは、究明すべき問題としては、既に主著の以前から、存在論が扱うべき主要な領域として歴史とともに自然を念頭に置いており、「ピュシス」とは「一般に眼前存在するものの普遍的な領域を、すなわち世界を、つまり星辰、大地、植物、動物、人間、神々を含む全体を包括している」(GA21, 1, 2ff.) ものとも捉えているからである。
- (24) 当該箇所におけるドレイファスの基本的な狙いは、ハイデガーの基礎存在論において、「自然と自然科学の対象について」の最小限度の「解釈学的実在論」を見出すことにある。それは、主にハイデガーが「内在的実在論者」とされる解釈傾向に反論する作業である。彼によれば、内在的実在論とは、「宇宙の内実」といったような「独立した実在」に対して絶対的に接近不可能であり、そもそもいかなる「それ自体」も存在せず、独立した実在は我々の実在性の定義(理解) に相関的にしかありえないとする考え方である。ドレイファスは、ハイデガーがこうした傾向に解されることに反対するのである。むしろハイデガーでは、一方で、科学が究極的な実在に特権的に接近可能にする見解に批判を加える側面を見て取る。我々は根本的に、社会的な背景的振る舞いによって常に既に拘束されているからである。しかし他方で、ハイデガーの内に、現存在の了解から独立的な自然の構造を読み取るのである。そのことを通じて、ハイデガーでは、「最小限度の解釈学的実在論」として、自然のそれ自体を巡って様々な可能的企投がなされて、「実在に関する多くの正確な記述がありうる」とされるのだ、とドレイファスは解釈するのである。Cf. Hubert L. Dreyfus, op. cit., pp. 252 – 261, 262 – 264. (前掲訳書、290 – 300, 302 – 305頁参照。)
- (25) Ibid., p. 256. (同上、294頁。)
- (26) Ibid., p. 257. (同上、296頁。)
- (27) Ibid., p. 258. (同上、297頁。)
- (28) Ibid., p. 264. (同上、304頁。)
- (29) 前節で見た「存在者は、存在者がそれによって開示され暴露され規定される経験や識別や補足には依存せずに、存在している」(SZ183) という点にドレイファスも着眼している。
- (30) Hubert L. Dreyfus, op. cit., p. 259. (前掲訳書、298頁。)
- (31) Ibid., pp. 259 – 260. (同上、298 – 299頁。)
- (32) ドレイファスは、別の箇所でも、「形而上学とは何か」でのハイデガーの議論を念頭に、自然そのものの開示をハイデガーに即して端的に指摘してもいる。Cf. Ibid., p. 258. (同上、297頁参照。) だが、彼は、そのような自然そのものの開示を巡って、不安を伴う(本来的な)「時間性」と彼の言う「自然時間」とが一体どのように整合的に結びつくのか論じていない。
- (33) というのも、ハイデガーの実在性の議論を巡り、ドレイファスは、恐竜などに対する科学的知見の成果を引き合いに出しながら、「結局のところ、我々は自然についての実質的内容を持った事実を知っている」。それゆえ、自然とは物自体的な「X」ではなく「コスモス」であり、しかもそれは、自然科学的な理解が許容され正しいものへと収斂して行っているという主張と整合的であるようなものだと思え、その観点をハイデガーのピュシス解釈に論拠として持ち込んでくるからである。Cf. Ibid., pp. 259 – 261. (同上、298 – 300頁参照。)
- (34) Ibid., pp. 259. (同上、298 – 299頁。) 本節冒頭で指摘したハイデガーの発言、すなわち、「現存在を時間性として学的に解釈することを、どの程度まで普遍的・存在論的な仕方で見ることができるとかという問い——それは私自身決定することができず、私にとってはまだ完全に暗い〔見通しの立たない〕問いである。」(GA26, 271) こうした言説を引き合いに、ドレイファスは、ハイデガーにおける自然の構造的独立性と時間との関係を巡って、ハイデガー自身が「未解決の緊張状態に困惑」していたと推察している。但し、筆者は、ハイデガーのかの発言は、厳密には、テンポラリテートにおける存在了解と自然との関係を如何に克服すべきか、という問題に直面した緊張状態であると解する。
- (35) 仲原は、「企投の破綻」という観点で、これが『存在と時間』で、本来的時間性が非本来的次元を無化することにおいて「存在の外部性」=「現存在が存在しなくてもそれ自体で存在しただけ存在することができる存在者」(GA24, 418) へ迫ろうとした「通路」であると言う。仲原、前掲書、208 – 214頁参照。これは、『存在と時間』の内に、了解作用の破綻において独立的な存在者へのアクセスを認めている点で、本稿にとって参考になる見解である。但し、むしろ破綻の実際は、ハイデガーの挫折という事実を最大限考慮するならば、その克服が試みられている存在了解の被投的な現場

- まで突き進んでこそ見極められなければならないと考える。というのも、ハイデガーは、この「通路」を元に「時間と存在」においてテンポラリテートを仕上げるまでには事実至らなかったからである。
- (36) 本稿のこうした現前性の理解にとって、以下の諸解釈を指摘しておく。仲原は、テンポラリテートは「存在の現実性と非存在の可能性の同時現前」が本来の意図であったと解釈する。それが、「各自的実存と普遍的存在の真理」の不整合、「本来的時間性と非本来的時間性」との排他的関係、「時間性とテンポラリテート」との混同といった、『存在と時間』の概念装置が抱える内的不調和のゆえに断念されざるをえなかったと考えている。そして「開示性と覆蔵性とを排他的に切り離して理解する」ハイデガーのそうした思考法こそ、『存在と時間』の挫折ないし「時間と存在」の未完を引き起こした根本要因と見なしている。仲原によれば、「現存在の存在」と「存在者全体における存在」は「一方が現実性として、他方が可能性として、同時に現前するという、根源的な〈共属〉の関係」の中でこそ見て取られなければならない。本稿では、「全き不審さ」を伴う自然の現前性を指摘するにあたり、こうした彼の見解を参考にしている。但し、「時間性とテンポラリテート」を本来は区別して、先駆的決意性を含む時間性のほうを排除しない限りテンポラリテートが成り立たないとする彼の解釈については、さらに吟味を要するので、改めて別稿で論じたい。また、齋藤が、「根源的自然」としての「ピュシス」の読解において、自然そのものに「非現前化を孕んだ現前化のキネーシス」を見出している点は興味深い。齋藤元紀、『存在の解釈学—ハイデガー『存在と時間』の構造・転回・反復』、法政大学出版局、2012年、382—446頁。主著『存在と時間』の時間論の問題を、初期から前期、さらに中期へと跨って解釈するよう試みている綿密で肝要なこの議論の検討についても別稿での考察に譲りたい。
- (37) 論文「根拠の本質について」では、「根源的な自然」は「現存在の中で、現存在が情状的に—気分づけられた現存在として、存在者の真っ只中に実存するということを通して露わになっている」とも言われる (GA9, 156f.)。